

猪 1 1 猪狩りの笑話 = = = 猪・鹿・狸より

現に自分の知っている一人だが、初めて猪狩りの勢子になった時、猪が恐ろしくて大しくじりをやった話を、何べんとなく語った男がある。話の筋はこうであった。狩場に着いてただ一人になると、猪がわが方へばかり来るように思えて、心配でならなんだ。やがてのこと、隣の窪でどんと一発筒音が響いて、ほーっと矢声がした。それを聞くと急に恐ろしくなって、夢中で傍らの栗の木へ駆け上って、来るか来るかと下ばかり覗いていた。猪を撃つなどの気持ちはとくに何処かへ飛んでしまった。するとまたもや近くで、一発筒音がしたが、それと同時にすぐ後のボロから、どさどさとえらい地響きを立てて何やら躍り出したものがある。それに驚いてびっくり飛び上がった拍子に足を踏み外して、根元へしたたか突っこけた。ちょうどそこへ一方を追われた猪が落ち延びて来て、男を尻目にかけて、ゆうゆうツルネ〔峯〕へ向けて走り去った。初め地響きを立てて、躍り出したのは、実はそこに眠っていた子猪たちが、筒音に驚いて遁げ出したところだった。お陰で腰骨を撲った上、仲間には笑われたり怒られたりして、猪追いにはもうこりごりしたと言うのである。

自慢話などちがって、当の本人の失敗談だけに、聞くものの興味は深かったが、実は同じ類の話を、他でも聞いたことがあった。あるいは臆病者の猪狩りについて廻った笑話の一つであったかも知れぬ。自分が初めて聴いた時の記憶では、まだ年が行かなかつたためか、充分おかしみのみこめなくて、かえって傍らにいた大供たちがげらげら笑っていたものである。

男の名前は、鈴木戸作と言うて、本業は木挽きだった。元来話好きの男で、また、話の材料を不思議なほどたくさん持っていた。自分の家で普請の時には、前後百日余りも泊まって仕事をしていたが、その間、いくらでも新しい話があった。この話なども、その合間に、面白おかしく聴かせた一つだった。

男もよし腕もよし、その上愛想がよくてどうした因果だろうなどと、自身でも言うていたほどで、その頃もう四五、六であったが、女房も持たず、近間の村から村を渡り歩いていた。よくよくの呑気者さなどと、陰で笑っていた者もあった。また、戸作の嘘話かなどと、頭からけなしてしまうものもあった。仕事を頼みたいにしても、どこにいるか判らぬなどと言うたほどで、定まった家もなかった。その頃自分の家に、古い三世相の本があつて、身の上を判断してやると喜んで聞いていた。数年前郷里へ帰った時、何年ぶりかで途中で遇ったら、ていねいな挨拶をして、貴方がいつぞや五六になれば身が固まると言うて下さつたが、お陰で家を持ちましたと言われて、面くらつたことがあった。

ごく呑気そうに見えたが、身の上を聞くとそうでもなかった。何でも親がひどく年取ってから出来た子で、兄弟達から邪魔者にされ通して育つたと言つた。

父親も他の兄弟達の手前家に置くわけにゆかないで、七つか八つの時分に親類へ預けられた。そこで子守をさせられながら育ったと言う。俺のように苦勞をしたものはなかったと、案外な話を聞かされたことがあった。

余計な話が長くなったが、前言ったような滑稽は、何も戸作の嘘話ばかりではなかった。実は多くの狩人に、共通の経験であったかと思う。ある村の物持ちの主人が、猪狩りに興味を持って、いっぺんやってみたくてたまらず、わざわざ真白い鹿皮のタツツケをこしらえて、凜々しい狩装束に身を固めてみても、いざとなると猪が恐ろしくなって尻込みして、ついにただの一回も現場を踏まらずに終わったなどの話は、对手が素人で物持ちの主人だっただけ、臆病さも一段と濃厚だったのである。